



うたそら

第
5
号

2021
November

11

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	04
テーマ詠欄「食」	26
一首評「そらよみ」	34
短歌リレーコラム「望遠鏡」	36
リレーエッセイ「いちごいちえ」	38
次回予告・編集後記	39

うたそら 第5号

発行：2021.11.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

次号予告 うたそら 第6号

連作欄 8首の連作 自由詠

テーマ詠欄 「暮らし」

一首評「そらよみ」

短歌リレーコラム「望遠鏡」

リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください

<http://kohagiuta.com/utasora/>



第6号 21 12/31 (金) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「暮らし」1首

第7号 22 2/28 (月) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「淡」1首

編集後記

11月を迎え、寒いと感じる日が多くなってきました。本格的に秋、そして冬へと季節の移り変わりを感じる今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

このたびは短歌誌「うたそら」第5号へのご参加、ありがとうございます。ご寄稿くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

第5号の参加歌人さまは96名、連作欄には74名、テーマ詠には77名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「食」。いろんな食べ物や食べ物じゃないもの(?)が登場する、「食」にまつわる短歌をお寄せいただきました。

一首評「そらよみ」のコーナーは5名のご寄稿と少しさみしい印象です。前号の「うたそら」からお気に入りの一首について自由に語っていただけるコーナーです。次号のご投稿をお待ちしております！

短歌なリレーコラムでバトンを引き継いでくださったのは貝澤駿一さん、リレーエッセイは谷じゃこさんが書いてくださっています。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えたっぷりの「うたそら」をお届けできます。どうぞごゆっくりお楽しみください。

「うたそら」ではTwitterでの咬きもお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は12月末メ切の年明け発行、テーマ詠のお題は「暮らし」です。年末年始の過ごし方や、日常のさまざまなできごと、アイテムなど、自由な発想でお詠みください。すてきな作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ



相河東 @aikawa_azuma
あき子 @ponko_san
麻数 @numbentemp
麻倉ゆえ @AsakuraYue
アダムス理恵 @adams_tanka
あつぽる @apple_109
天野うずめ @uzume_no_hijiri
雨虎俊寛 @amefurashi3107
新井さわ @kiwakuwaku1226
有村桔梗 @chattenoire_k
歩歩 @subperf
五十子尚夏 @Hitler57
池田竜男 @yunosuketanaka
石川順一 @110sumikodoyo
五ツ木居家 @inAn_erotica
伊藤すみこ
インアン

宇祖田都子 @Shinsyutuz2020
泳二 @Eishimada
Ts @hswelt
大坪命樹 @OotsuboMeiju
大橋春人 @hachidax2
岡田濤 @kakomiyano
小椋杏 @ogura_anne
小澤ほのか @honokaosawa
音平まこと @nandemonahi16
回帰しころ @toiot_0000
貝澤駿一 @y_xy11
がね @amicus08
涸れ井戸 @kareido1111
河岸景都 @kate_kawagishi
菊池洋勝 @kikutic
北村美晴 @kame073
橘高なつめ @coconutkiko
君村類 @kmr_r09
久助 @ntBm64shitap
くろだたけし @tkuro2016
酒匂瑞貴 @sakawa_mi
佐々木ふく @sasakifuku3
佐藤水魚 @satoho_tanka
汐射ハルカ @haru_c17h17c2n
紫苑 @purple_aster
詩季 @4kitanka55
鹿ヶ谷街庵 @ikasamabakuchi
嶋田ちゅうこ @sakirako0304

西鏡 @xi_zhen_ivt
雀来豆 @jacksbeans2
白石夜花 @yohana_no_sekai
寿々多実果 @guzura4227
諏訪灯 @skydew
たえなかず @suzusuzuz2009
多香子 @abcdefghijklm
瀧口美和 @chik325
竹林ミ来 @sabajaco
谷じゃこ @yom_tanka
丹花ヨム @L_L_Jawlet_
探偵ハットケーキ @white22autumn
茅野 @kohagi_tw
千原こはぎ @greenghariz
Chori @geshodo
月硝子 @northmount836
つきひび @croissant_hey_z
ともえ夕夏 @nakam8
中村成志 @yuu11ne1217han
にう @jacky244Ray
西淳子 @nsmrakra
西村曜 @nekonokanae_uta
ネコノカナエ @ale0himeco
薄荷。 @k_hayatsuki
早月くう @may_spica_358
雛河麦 @xHksbRf4wv1wj8M
ヒップ寿司マイク @Hirochin_dos
廣珍堂

細川エリカ @luvlvkasen
真岡まな @mao_or_mana
まゆけ @mskpompomfuwa23
松島ゆうり @you1475963
真野ありか @o_shionec
御糸さち @MEATsachi
三浦くもり @miurakumori
深影コトハ @cotoha_mikage
水也 @m_ya_o
宮岡 蓮子 @57577_77575
深山睦美 @mushitake
虫武一俊 @Tohakumutun5057
六浦筆の助 @meremumai
六厥めろ @sui_musubu
村田一広 @yuya_yuki_tanka
結川澄衣 @b7282e_akaneiro
ゆやゆき @yoko00022
ゆりり @oppizuntsuan
葉子 @R_velvet_Cake
龍翔 @hrm143ponta
渡邊知博
和田晴美

計 96 名

たくさんの方に参加
ありがとうございました！



蜘蛛の巣に引っかかってしまう虫だ 君に絡まって抜け出せない
 月食の頻度でいいの、一番に私を愛してくれませんか
 抑えなきゃいけない想いと脳は知りころが単独行動をする
 「好きだから」「あなたの傍にいたいから」手品の国旗のように吐き出た
 触れかけた指先に残る温もりがわたし以外のものとは知りつつ
 肩と肩3秒に1度触れ合っているのに空気を握っている手
 助手席に座る権利は得たけれど関係はまだ白紙のままで
 満月とかそんな贅沢言わないし三日月ほど好きでいて欲しい

淡い三日月

あっぱる

夢だったら良かっただろう 暗闇を落ちる理由も忘れかけてる
 13として定義する死神や裏切りは華 善処してます
 灰色のホラー映画は残酷なくらいに味と匂いがしない
 私から戦いを奪わないでよ 全てをトルティーヤに包みこむ
 紫の煙と青い空の色 散らばる光は数学の色
 ティーポット、何で満ちてる？ 人生の問いとしては簡単な方かな
 超弩級戦艦、火口、オリオン座 ふしぎの国にもある落とし物
 バネつきのイルカは空の夢を見てめでたしを知らないまま生きる

素数回目の落下

相河東

何にでも染まる白ではない白になるから五十年待っててね

谷じゃこ



いだ。階段の上り下り疲れる〜とか、霜降りの
 肉おしいのにきつい辛い〜とか、私ももう
 年ですなあと思うことはいろいろあつたけど、
 服が似合わんのが一番ショックやった。
 そんな時にふと目に止まった一冊の、真っ赤
 な部屋で楽しい服着てにこっと笑ってる角野栄
 子さんのかつこよさに、あの時似合わなかった
 お気に入りのポップな服を着て笑ってる自分が
 ポーンとイメージできた。というかイメージで
 きすぎてしまつて、将来絶対白髪になりたい〜つ
 てとこまで決まった。角野さんと私はだいたい
 五十歳離れてるんやけど、五十年も先になりた
 い未来が待つてゐるって最高じゃない？！
 カラフルな眼鏡をかけた白髪のおかつぱが現
 れたら、それは私かもしれません。うまいこと
 白髪になれてない可能性はあるけど、お気に入り
 のポップな服は着ていきますね。五十年後、
 どこかの歌会で会つたらよろしく。

5

リレーエッセイ

いちい

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

白

書き手

谷じゃこ

こないだ「なりた顔」という言葉を知って
 びっくりした。好きな顔や憧れの顔じゃなくて、
 なりた顔って。なつてしまったらそれもう自
 分ちゃうんと思われへんのやが、どうや
 らそんなに珍しい考え方じゃないようで、たく
 さんの人がツイッターで話題にしていた。私は
 自分の顔が気に入ってるから他の顔になりたい
 と思ったことはなかったけど、なりた顔はあ
 る。角野栄子さんの頭になりたい。
 角野栄子さんは『魔女の宅急便』や「おぼけ
 のアッチ」シリーズを書いた大変人気の児童文
 学作家。エッセイも書いてはって、その表紙が

ご本人の写真なんやが、角野さんの髪型が私が
 将来なりた顔の超理想形の頭なのです。きゅん
 としたかわいい白髪（はくはつ）。カラフルでポッ
 プな眼鏡がめちゃうくちや似合う。
 ちらほら白髪（しらが）は生えてくるけど、
 全部きれいに白髪（はくはつ）になれるかどう
 かは年を取ってみんとわからんよね。遺伝とい
 うことから考えると、両親共に白髪（しらが）
 まじりつて感じやけど、二人とも角野さんみた
 いなきれいな白髪（はくはつ）ではないし。白
 髪（しらが）を見つけても切らずにそのままに
 していたら、そのうち白髪（はくはつ）になれ
 るんやろか。というか（しらが）と（はくはつ）
 が同じ漢字なんややこしすぎる！
 三十代も終わりに近づいてきて、これまで普
 通に着ていた服が似合わなくなってきたと感
 じている。特に明るい色合いのポップな服。ほ
 んまに似合わなくなったのか、脳が勝手に適齡
 フィルターをかけてしまつてんのかはわからん
 けど、「あつこのお気に入りのかわいい服、久し
 ぶりに着よう」と鏡の前に立つたら、首から上
 と下で別のものを見ているようでいそいそと脱

ファンタジア

雨虎俊寛

上空は満点の星きみだけの夜のミッキーマウスになれる
似てゐらしいにやにや顔のチェシャ猫のフロートまばゆくつづくパレード
電飾の廻る白馬に横座り恥ずかしそうにきみは手をふる
きみが喋る笑う歌う踊る触れるひねもす僕に光は射して
青白く灯るお城の傍らのベンチに座る 靴がぶつかる
帰りたくないと言わせた改札で今またきみと主役になれそう
クロークによい子を預けたシンデレラ 時計の針が重なる前に
今宵からティンカーベルの星屑を浴びても空を飛べない僕ら

花咲く街へ

新井きわ

ああ、そうね。こちらは彼岸に近き世界ゆえ時計の針はゆっくり廻る
透明なクリオネのようＩＣＵの酸素計に光るわたしの中指
無機質なコンクリの壁に囲まれて死のあやしさに充ちるＩＣＵ
婆娑羅髪振り乱して死にたいと言っていた我思いのほか静か
修道士みたいな医師がせつせつと恋するくらい命を論ず
今日もまた私の代わりに誰かまた黄泉へとくだる 月がまあるい
家族等に囲まれ逝きし裕子さん我がかたへには誰も居らぬぞ
春風を胸いっぱい吸い込みて我黄泉返りおり花咲く街へ

閨値

有村桔梗

皮ごとのぶだう一粒ふふむときわたしのうちに秋ふかみゆく
星月夜 ページめくりて黙読のひとのまなこは冷えてゆきたり
眠りつつ眠るゆふべのまなうらのふかくふかくに星は墜ちたり
疼痛を抱いて眠ればくらやみに研ぎ澄まされるさみしさはある
かるがると閨値を越えて木屋の匂ひに夜が震へてゐたり
うつすらと青みを帯びて黒猫は夜のあはひをすり抜けてゆく
過ぎてゆく秋惜しみつつ台湾の花の匂ひのお茶を淹れたり
読点をひとつ打たれてまたすこし冬の気配の増しゆく並木

Fall／テキサスヒット

五十子尚夏

秋の夜の長さについて語りつつマカロニウエスタンを見ている
向日葵の無限遠点 ただ一度あなたと交わす約束がある
秋風に 思わぬ人と再会を果たしたようなテキサスヒット
貢ぐこと二度、貢がるること三度と女は言えり うつくしき朝
秋深く恋人の腕のなかに告ぐヒッチコックの『鳥』が怖いと
佐藤優樹に煽られている幾たびも見返す夏の野外フェスにて
星月夜 あなたの指がうつくしく秘匿している使途不明金
秋の夜はうつくしテニスラケットにパスタを湯切りするときも

らは、波乱万丈ありつつ最終的には望んだもの、
例えば、聡明で信頼のおける親友トラドルズや、
幼なじみであり天使のような才女アグネスを手
に入れているのである。狂おしい恋をした末に
結ばれた最初の伴侶・ドーラは妻としては精神
的に幼すぎたのだが、彼女は理不尽な病気で物
語から退場させられてしまった。デイヴィッド
は、もとい、デイケنزズは（これは作者デイケ
ンズの自伝的要素が強い小説だ）、ドーラへの責
任を放棄して、物語をもとあるべき結末（つま
り、アグネスとの結婚）に収束させたかったの
だろう。こうしたとしてつけたような結末こそ
が、デイケنزズ文学の最大の特徴なのである。

先のホールデンの発言は、つまり、こうした「デ
イヴィッド・コパフィールド的」物語への批判
とも読み取ることができる。もっとも、放浪の
末に最後には（思った通り）精神病棟に回収さ
れてしまうホールデンにとって、この批判は結
局自分へと帰ってくる皮肉のようにも思う。最
終的には「もとあるべき結末」に収束する、そ
んな「デイヴィッド・コパフィールド的」物語
には、過去・現在・未来という連続した視点が
必要不可欠である。「未来」から見て「現在」が
こうで、そのための「過去」があったからこそ、
読者は「もとあるべき結末」に戻ってきたとい
う作者との合意を得られるのだ。ホールデンに
とって過去は捨象されるべきもので、未来は予
測不可能なものだった。ただ、「いま」だけをが

むしやらに語り、そして力尽きたような印象だ。
予測不可能な未来が横たわっている限り、ホー
ルデンの物語は、「デイヴィッド・コパフィー
ルド的」物語になれるはずもなかったのである。

いま、僕は現代短歌の世界に身を置いている。
現代短歌では、「デイヴィッド・コパフィー
ルド的」物語が注目されることは少ない。現実
は、ホールデンという繊細な語り手を生んだあ
の荒涼とした世界に近づいている。予測不可
能な未来に怯えながら、なんとかして「いま」
を歌おうともがいている、そんな世界に若い
歌人たちは身を置いているように思う。

（がんばろういつまでなにをがんばろう） 岡方
大輔 その上に月／岡方大輔「ソウル・デ
ィスタンス」（「かりん」2021年9月号所収）

「がんばろう」と思っている自分、もう「がんば
れないかもしれない」と思っている自分を、恐ろ
しく冷静な目で見つめている。その冷静さが、
かえってこの主体が置かれている不透明な未来
のことを暗示している。この人には、「デイヴィ
ッド・コパフィールド的」物語の結末はおそらく
見えていないのだ。としてつけたように置かれ
た「月」が、「岡方大輔」という人間をスポット
ライトのように照らす。それは同時に、ライト
が途切れればそこにはいない、「いま」そこ

にただだけの存在であるということも突き付け
る。岡方は2021年6月に急逝、死後に「ソ
ウル・ディスタンス」30首で2021年度「か
りん賞」を受賞した。

たぶん親の収入超せない僕たちがペットボ
トルを補充してゆく

／山田航『さよならバグ・チルドレン』

おそらく現代短歌のなかでももっともよく知
られた作品のひとつである。それだけに、現代
社会に対するさまざまな問題意識を読み取るこ
とができるだろう。永遠に「ペットボトルを補
充」する未来は、はたして「もとあるべき結末」
と呼ぶことができるだろうか。労働の意義を奪
われることによって、未来は規定されてしまう。
この歌は「予測不可能な未来を生きる」という
産業社会のスローガンが、とんだ詭弁であるこ
とを追及しているのではないか。いわば、負の
「デイヴィッド・コパフィールド的」物語のよう
なものだ。「もとあるべき結末」、つまり望んだ
ものを手に入れるための過去・現在・未来があ
るのではなく、ただ「いま」と代わり映えのな
い未来が用意されているだけなのだ。これは作
者（デイケنزズ）によって救済されなかった「か
わいそうな男の子」デイヴィッドに用意されて
いた未来なのだと考えるのは、それこそ「もと
あるべき結末」にすぎないのだろうか。

望遠鏡 5



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手 貝澤駿一

テーマ 〈デイヴィッド・コパフィール
ド〉的あれこれ

夏中ちまちまと読み進めていた、チャールズ・デイケンズ『デイヴィッド・コパフィールド』をようやく読み終えたのは、前線が列島に停滞し、とても夏のように思えないような涼しい8月の日だった。この小説を読破することは、10年来の僕の夢でもあった。

19歳の僕は、(いま考えても「いつたいなぜ?」としか思えないのだが)ある日突然「英文科に行こう!」と思い立った。英語が好きで文系を選び、文学部に進学したのはいいけれど、当時の僕は英文学に特別強い関心があるわけではなかった。むしろ、大学で初めて触れたロシア語の方が面白く、唯一ロシア語講読のゼミがあっ

た倫理学科か、もうひとつの得意科目であった世界史の知識が生かせそうな、西洋史あたりにするものだと思っていた。その選択を後悔するわけではないが(むしろ教師になるうえで英語の免許が取れる英文科はありがたかった。社会科の免許だけでは専任に採用されにくいのだ)、あのとき「英文科に行こう!」と決めなければ、いまごろ僕はどうなっていたのかと、やっぱり今でも「選ばなかった自分」の姿を思ってしまうことはある。

専攻決めに悶々としていた19歳の秋に、J. D. サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』に出会った。はじめは野崎訳、次に英語で読み、少し間が空いて村上訳にも挑戦した。

ほんとうに僕の話が聞きたいなら、きっと、僕がどこで生まれて、どんなうんざりする子ども時代を過ごしたかとか、僕が生まれる前に両親が何をしていたかといった、デイヴィッド・コパフィールド的な、うんざりすることを知りたいがるんだろうね。でも実という僕は、そんな話をする気にはならないんだよ。

これは村上春樹訳の有名な書き出しだ。主人公のホールデンは、(そういうそぶりは見せないけれど)心に傷を負った繊細な少年であり、〈デイヴィッド・コパフィールド的〉物語を捨て去って、〈いま〉をありのままに語ろうとする。僕はどち

らかというと、〈デイヴィッド・コパフィールド的〉物語をしたがる部類の人間だと思う。つまり、そうした過去と現在と未来の連続性の上に〈わたし〉がいるということを、案外大切にしているからだ。のちに短歌の世界に入って、〈デイヴィッド・コパフィールド的〉物語との付き合い方は人それぞれなのだというのに気が付いた。ホールデンの告白は、昨今の若い世代の短歌によくみられる、〈わたし〉の存在を可能な限り希薄化する歌に通じるところがあると思う。

19歳の僕の『デイヴィッド・コパフィールド』に関する基本的な理解は、「かわいそうな男の子の話」、たったそれだけだった。けれども、ホールデンの言おうとしていることはよくわかった。要するに、この物語は過去の悲劇でも未来の喜劇でもなく、〈いま〉16歳である少年の生身の物語だということだ。それを受け取る読者としてのわたしたちは、ここで彼が言う〈デイヴィッド・コパフィールド的〉物語を脇に置いて、この繊細な少年の語りに耳を傾ける必要がある。たとえそれが、信頼できない語りであってもだ。

時が経ち、僕はようやく、ホールデンが嫌悪した〈デイヴィッド・コパフィールド的〉物語の全貌を知ることができた。最初から読み進めてみると、デイヴィッドの人生は結局恵まれていたのだろうという結論に至った。邪悪なマードストーン姉弟に虐められている幼年時代はひどかったが、それを突飛な行動力で乗り越えてか

夢八夜

池田竜男

土という杭を持たない夢の樹はすぐ動き出し獣よりしなる
針穴の冬眠熊を揺り起こし円弧またげと答ふるう熊
ジヨジョたちのくちびる迫りつめてくたて堅果のように だめだね という
火葬より土葬がいいというクモはつねに空からひかる糸吐く
兵どもの夢また夢に連なって刺サボテンの巨きな白花
堀越えてアオスジアゲハ空となり雲よいとしと白花を吸う
子から子へ蹴り渡された石として雨粒たどる石の擦り痕
蜂に刺され蜂の黒服を縫う日々蜂の責任裁判で問う

写真に触発されて

石川順一

自転車に箒と塵取り掛けられて旅立ちの歌が聞こえて来ない
濁り酒秋刀魚の寿司と調和せり台車の音が仲を引き裂く
バーガーとどら焼き食べる朝餉かな畳の工事が二日で終る
壁の穴排気孔へと繋がれば鳥のはばたき聞こえなくなる
公園の芝生の丘を登るのは小学生の奇声聴くため
葡萄棚連の葉破れて甕は在る観光バスは芭蕉の葉のそば
花菖蒲の暖簾は貝の留め具持つ花に人間の顔を期待するなど
焦点の定まらないいま月を見る下弦の月なのか三日月なのか

アダルト

五ツ木居家

「マブだよ、あたしら!」覗くような目をしている。そうよ、マブよあたしら。
希望って書いてしまうと叶わないから白紙の進路希望調査表
(あの信号引つかかったらまた落ちる) 験を担いでしまう三月
ぼつと浮く センター街の居酒屋でひとり幽霊離脱しました
大学も仕事もずっと制服がいい、わけがない今日は君と会う
左手の紅差し指の金属が資格みたいで気になっている
いつからか丑三時が怖くないかわりに淋しい アイスを買った
日の暮れた中央道でコブクロのかかる車内に夏の残像

特例市育ち

伊藤すみこ

原宿は異世界だった青文字をかわりばんこで読んでいた春
目的のあるヴィレバンはつまらない流浪するだけそれこそ正義
老人のサロンと化した平日の国道沿いのマクド しんどい
成長と反比例して寂れてく街の背骨を撫でる秋風
店内を埋める茶色い笑い声コメダの豆をもそもそ食べる
妥協して中古の軽を迎えれば即座に上がる生活の質
駅前已成城石井ができたとき皆少しだけ胸を張ってた
無いものが多すぎるのに高級な食パンはあるピンぼけの街

甘い辛い酸っぱい辛い

インアン

心から愛せないもの並べてもほんとは寂しいよりどりみどり
愛と呼ぶ 終わりががあると知っていて始まってしまふ恋の寛容
大気圏捨てて無重力になって見に来て欲しい月の裏側
不器用な曲線にナイフ滑らせてうすく取り出す裸の洋梨
秋雨のような優しい唇と滑らかな舌を二枚持つ人
歪んでるまあるい水に密やかに夜囚われて私は金魚
甘い辛い酸っぱい辛いどれが好き？どれが欠けてもつまらない？
脱がないと決めてガラスの靴を履く かぼちゃ色したメトロに乗って

屋上猿部V

宇祖田都子

パリパリのクロワッサンは犀に似て夢見るものは硬くて脆い
先輩の夢の証は秒針と長針のない懐中時計
〈バク修理・オーバーホールいたします〉もう今はない市外局番
屋上に穴がぽっかり一つありバクは単孔類かもしれず
ウリ坊の繭がフェンスを埋め尽くし夕陽に透ける夢に似たもの
木星が大きく見えた夜のバスバクの蹠はやわらかかった
顧問から指示書が届き折り紙でせつせと折っているだまし船
エコーこの屋上に来てナルシスの夢の水面を乱しておくれ

オーバーラップ

泳二

鈍色に静む真冬の新宿に白頭鷺が羽を休める
細切れの約束を貼り直しながら明日の天気予報を見つめる
爆心に雨降り止まず地下街はしなやかな者たちの楽園
あたたかなれば二人であたたかい街を歩こうもつとゆつくり
幾千の玻璃の墓標をかすめ飛ぶひまわりたちを乗せた旅客機
青空を映したビルに守られてこのまま雪が降ればいいのに
かつてキャバクラの並んだ坂道に先端恐怖症の狸々
傘を持つわたしの指が手のひらで包まれているプラザ通りで

煤くる餅を搗く

大坪命樹

ひさかたの月見がために芒花もとめて残暑の常願寺川に
あしたより餅米炊けるきみ作るごまときなこの団子のかほり
月の出を待ちわびながら食卓の芒と団子の前にてふたり
ペランダに満月の柄ながめをり上に綿雲下に虫の音
うさぎ柄見極めんとて目を凝らす われも古人の目をもたませば
すすき草手に持つきみはうさぎ歳われ不肖とて月にな帰りそ
満月のうさぎつく餅いかなるか 偲びてふたり団子をつつく
望月ようちのうさぎの餅美味し彼方より妻の搗きぞ望めよ

一首評

そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです



降りつづく雨のしづけさ さみしさを集
めてしまふ臓器を思ふ

有村桔梗

降る雨に詠まれた〈しづけさ〉は小さな驚きだった。
雨と雨音は不可分、という先入観を脇に避け、脳裏
に雨を降せてみる。と、雨音は鳴り続くものの、そ
の他の音という音は世界を包んだ水の膜に吸い込ま
れ、そこに横たわる静寂に気づかされる。この感覚
を〈しづけさ〉と詠ったのだろう。下句で詠われる
臓器は判然としない。だが、先の〈雨のしづけさ〉
を踏まえれば、自然と誰もがそんな臓器を抱えてい
る気にさせられる。

一首評

西鎮

ひとりだけプラネタリウムに残されて宇
宙が消える瞬間を見た

河岸景都

難しい言葉も捻った言い回しも無い、ただ頭から尻
尾まで具象を並べた歌。しかし、その二十八文字の
中に確かな時間の流れと終わりが、内包されている。
事実として読むか、比喩に託すかは読み手次第だが、
ラスト、過ぎるくらい唐突に下ろされる幕と、その
寸前にチカリと光る何かが、こちらの目を射す。

一首評

中村成志

ひとりだけプラネタリウムに残されて宇
宙が消える瞬間を見た

河岸景都

静かな調子で歌われる連作。ロマンチックや諦念や
追憶や憧憬や悔恨やいろんな感情があふれている、
年長さんには少し過剰でとても全部は受け止めきれ
ない。でもこの最後の歌の感傷は好きだ。この歌で
連作は閉じられて、ぼくらは一斉にまた外の世界へ
出てゆく。一首目も好きだ。とても静かで真つ当な
世界についての認識。二首目の白いインクと線、三
首目の銀河の底の砂のイメージも好きだ……。な
んだ八首、全部ステキじゃないか。

一首評

雀來豆

学生の作文に朱を入れ終へて吾が手を見
れば赤く染まれり

久助

連作「海の教室」からの一首。教師たる主体は赤イ
ンクに塗れた自分の手をじっと見つめて、仕事の一
段落を実感しています。手の赤の加減が学生らの作
文の出来に比例しているとすれば、この日の評価は
概ね良なのか、全くだめだったのか、読み手側も気
になってしまう場面でもあります。つまるところそ
れは、ちゃんと指導できたかどうかのパロメータ
ーにもなり得るわけで。主体のため息が微かに聞こえ
てきそうな質感があります。

一首評

詩季

かたくなに「ほね！」と言い張り幼子は
さくらんぼのたね弄りつづける

西村曜

さくらんぼのたねを「ほね！」と言い張る幼子が可
愛らしいです。「たね」を「ほね」とすることで、そ
れを弄りつづける幼子の姿が不気味で怖く見えるの
も良いですね。可愛い狂気。この歌を読んで、「ほね
」と「たね」にはいくつかの共通点があることに気づ
きました。どちらも固いものであり、肉（果肉）が
ついていないこと。食べ終わったあとなどに残ること。
また、音も似ています。幼子が「ほね」と言い張る
ことに納得の一首でした。

一首評

西淳子

テーマ詠 「食」

放送を終えたテレビが連れてゆく永遠に捕食されないサバンナ
 さあ早く帰ってピザでも食べようか おかえりという声がなくとも
 本物の最後を食べて思い出す 君が笑った最初の晚餐
 食洗機が洗い残したご飯つぶを食べて心に降る古い音
 受験合格、独りでチキン食べる吾に「飲もう」と歌う森高千里
 ハートが割れるハートが割れるハートの欠片を貰でてゆくハートチョコ
 一人でも寂しくは無いでも椅子はいつでも二つ食卓に添う
 焼き上げたスイートポテトアップルのパイを早口言葉めき食む
 きみのこと食べないままでいられたのまだ酸素が毒だった頃は
 気を抜けば泣き出しさうでほろほろとおでんの汁に溶かすじやがいの
 「夏バテ」に罪を被せる学び舎や 君のうなじに箸が進まず
 夕ぐれに人見失ふふたり掛けベンチで食みをり人参のラペ
 夕食を作る夫の佇まいそれなりであり今は褒めちぎる

- ◆ 深影コトハ
- ◆ 宮岡 蓮子
- ◆ 深山睦美
- ◆ 虫武一俊
- ◆ 六浦筆の助
- ◆ 村田一広
- ◆ 結川澄衣
- ◆ ゆりこ
- ◆ 葉子
- ◆ 龍翔
- ◆ Redvelvetcake
- ◆ 渡邊知博
- ◆ 和田晴美



平均寿命

大橋春人

おはなしでよければどうぞいつまでも二人仲良く暮らしたそうな
 嘘をつく方がやさしくコーヒーにミルクを混ぜぬ二人であれば
 アラフォアの相聞歌など もつ鍋と来季の最肩チームのことを
 野うさぎの平均寿命を知らぬまうさぎの国のビールを飲もう
 お互いの最肩の勝ちを見届けてスポーツバーを足速に去る
 手を繋ぐことは少しはためらわれ コロナのせいかもしれない歳か
 水色のバスがあなたを連れてゆく明日の方へ開降る街へ
 人の死ぬ映画はあまり見たくない九時のホームの静けさたるや

風

小澤ほのか

きらきらと川面が揺れるあそこは色なき風の通り道だな
 秋風がそよぎ夕焼け消えるまで君と歩いた道をたどった
 つむじ風吹いて枯れ葉を巻き上げる 下から上へ見上げる児らよ
 木犀の香りが風にのってくる つと立ち止まる白杖の人
 「こんにちは！」とドア開け挨拶する甥と一緒に飛びこんでくる風は
 午後二時の風になびいた三つ編みの少女のリボンながめ続けた
 糞虫が風にゆられて右左 声なき声の聞こえたような
 あなたへの尽きぬ想いを風に乗せそつと見送る いつまでも秋

ニュータウンのさざなみ

帰帰しとる

ピアノ弾く形のまんま右の手で置いた感じがある駐輪所
 コンクリに影を当てれば面が立ち自分になるから吸い込まれたい
 「あんたなに」「バラボラだけど」「そう」「え？だれ？」「この白の申しにたい女」
 赤子よりジョイスティックが定まらず泳ぐ目泳げど窓のまま
 午前4時電波時計が回るのは今日のデータをリロードするため
 えつといま回の字型のゴミ捨て場模して折られた世界に居るよ
 あれがこの町にひとつのガソスタでいちばんでかい直方体で
 白は畏怖君を浮かせて帰らせるもしも世界に窓が開いたら

管理人

貝澤駿一

きこの鍋ばかりつくってしまう秋きみはチューハイ一缶で酔う
 浮浪児のしらみだらけの髪の毛を思うエノキにからまるワカメ
 管理人のおばさん道を掃いているそんなことしなくてもいいのに
 明日死ぬと思って今日を生きなさいスーツの人が駅で寝ている
 わが町は地味な乗り換え駅なれば乗り換えのため人があふれる
 乗り換える人には目的地があつて いいな この町はただの通過点
 この家にいれば事件は何もなく何も無いけどいる管理人
 おばさんがきつと証言してくれるぼくのアリバイ 仕事に行こう

サイゼのワイン

がね

誰を渡そうとしての花筏 立ち止まってから剥がす瘡蓋
かなしみは自分で見付けるしかなくて南十字は小さい星座
退屈が少し怖くてコンビニの雑誌コーナーに持ち寄る孤独
友人の自虐にそっと笑うたび海馬の中のみどり児が泣く
ふたりなら無敵だったプリキュアもサイゼのワインを飲むんだろうか
隙間から見ると東京の青空はプラネタリウムよりも小さい
順番に屠殺されてく家畜とは寿命の意味が違うのだろうか
靴裏にガム引っ付いて感触の変わる夕べに踏み出していく

西宮北口

瀬井戸

阪急に久々に乗る十三を越えて特急新開地行
西北に降りる週末宣言が昨日に解除されて青空
会議室借りた九人の歌会が半年ぶりに息吹き返す
駅前の緑地に家族連れ集いマスク以外は昔と同じ
辺土にも祝祭はあり馬鹿でかい鳩時計くわくと唄いて
家族連れやたら多くて懐かしい日々が戻って来たかのように
忌憚なき意見びしびし飛び交って未知の扉が軋み始める
打ち上げは固辞し駅へと早足でまだ空は燦燦とまぶしい

マスカレード

河岸景都

嘘つきを暗い小部屋に閉じ込めて正直者の練習をする
口角が綺麗に上がるペテン師の語る言葉は何故か優しい
気に入った仮面を付けて手に入れるマスカレードの参加資格を
見えるもの全て偽物だったならこの鼓動だけ本物でしよう
ヴェネツィアンガラスの歪み確かめて安心をする小さな心
善良な一般市民を装って暮らす私は怪物なのに
きらきらとまばゆい石を積み上げるこの光では息がしにくい
神様がダンスホールへ放り出す踊る相手も選べないまま

それうすべてを抱いて眠ろう

菊池洋勝

行つて迷ふの楽しみな洋食屋それらすべてを抱いて眠ろう
いま父は何を食べても豚の餌それらすべてを抱いて眠ろう
海老天で食べる弁当夏見舞それらすべてを抱いて眠ろう
おつぱいの食み出してゐるマリトッツォそれらすべてを抱いて眠ろう
食べ切れる量を間違ふ中華蕎麦それらすべてを抱いて眠ろう
菜虫が食ふものだから人にもうまいそれらすべてを抱いて眠ろう
人に押し寿司鹿に煎餅を食むそれらすべてを抱いて眠ろう
黙食の食事介助や雨蛙それらすべてを抱いて眠ろう



スーパーに翻車魚の切り身ならびゆく天津小湊町の七月
むしろその若草色の切り株がブロッコリーのメインディッシュだ
簡単にプレーンピザと言うけれどチーズとトマトは腹探り合う
パンケーキ食む、食む これは確固たる生命維持だ 食む、ひたすらに
執拗に指は脂を舐め取られ個の連なりを背骨だと知る
ポケットのなかにラムネが一粒あり、わたしは誰の食玩ですか
残酷であればあるほど可笑しくてあじの開きを暴く二人は
ミントパフェ食べに行こうよあの海にこぼれる空とおんなじ色の
うどんより蕎麦を食べたい日が増えてすこし大人になった気がした
ラップ越し握られているおにぎりは愛されてると思えずにいる
ちやぶ台の納豆混ざるぼくの手は去年よりやや速くあるかも
氷咲く空のオリオン三つ星を串刺しにして河原で喰らう
ひとくちが 大きい君に驚いて 笑えばきよともぐもぐする顔
賞味期限切れた乾パン食べながら彼氏のいない5年も碎く
コンビニでアプリに伺い買うランチ コーヒーだけはスタバに行こう
やむことのない雨あけることのない夜たべおわることのない肉

◆ chari
◆ 月硝子
◆ つきひざ
◆ ともえ夕夏
◆ 中村成志
◆ 西淳子
◆ 西村曜
◆ 薄荷。
◆ 早月くう
◆ 雛河麦
◆ 廣珍堂
◆ 細川エリカ
◆ 真岡まな
◆ まさけ
◆ 真野ありか
◆ 御糸さち

テーマ詠 「食」



コストコで買ったホノルルクッキーのバターの奥の海まで食べる
 蝕変光齢二十五しののめの星を数へてわたしをいきる
 かげろふのごと入管に死せるをみな「たべたいです」とふ文を遺しき
 牛丼にカフェオレ今日の弁当も茶色だ夢を鍛える色の
 あんぱんをちゃんと半分ずつにしてひとりで食べるとちゃんとむなしい
 食パンの耳を噛むとき遠のいてゆく風あびて麦の穂ゆれる
 姉さんはチョコ、妹はバナナ、わたしは絶対に髪を切らないつもり
 幼気な魔女の呪文を聴いたなら菓子を差し出せ ハロウィンナイト
 食べられる食べられないを見てばかり植物図鑑をめくるわが子は
 脳というよりも両手が記憶して流れるように作るグラタン
 にこにことホラー映画のあとときみはステーキを刺す追いつめながら
 「つまみ食いしてもマスクでばれないね」ベリーポジティブシンキング妻
 ハーゲンダッツのごほうびが許可となる痛みの基準を日々甘くする
 ナックルの握りで食べるおにぎりが硬い 明日はフォークにしよう
 皿の端 食べ残されたピーマンに 初めて我が子の「意志」を受け取り
 のどかだな ケチャップまみれのキッチンを掃除し続けている一時間
 ◆ 佐藤氷魚
 ◆ 汐射ハルカ
 ◆ 紫苑
 ◆ 詩季
 ◆ 鹿ヶ谷街庵
 ◆ 西鎮
 ◆ 雀來豆
 ◆ 白石 夜花
 ◆ 寿々多実果
 ◆ 諏訪灯
 ◆ たえなかず
 ◆ 瀧口美和
 ◆ 竹林ミ來
 ◆ 谷じゃこ
 ◆ 探偵とホットケーキ
 ◆ 千原こはぎ

犬と歩けば

橘高なつめ

知り合って間もない人とスピッツのチェリーを歌うひょんなことから
 遠のけばヒエラルキーに潰された化石のような私が見える
 濁りゆく残り湯みたいじんわりと温もりだけを残された肌
 飼われてるくせに態度が野良犬だ呼んでも来ない尻尾ふらない
 忘れたい名前書くたびぼきぼきに折れたクレヨンうんざりしてる
 寝静まるベッドタウンを横切れば次々光るセンサライト
 まっ白い犬の眉毛がマジックのしかも油性で書かれて太い
 アンニュイな彼に伝えて配られる新茶おかわり二杯までだと

投了

君村類

眠るのをセーブと仮定するときのゲームにはあるデータリセット
 遡上するタイムラインの果てで産む孵す氣のない憧憬のこと
 肢体からコントローラーを投げ出せば動作不良の自分に会える
 のたうってつめたい床をぬるい床へと変えながら待てば 夜明けは
 たのしかった、たのしかったな、たのし、かった 過去形にしている落涙
 腫れた目を塞ぐ掌 平熱は東京二十三区の気温
 とりあえず、もういいですか 焼けるとき本音も空へのぼるのだろう
 われわれのセーブデータは脳にある わすれていってください

三島のうなぎ

久助

小上がりに昼のテレビは流れつゝ緑茶啜りてうなぎを待つ
 香ばしく甘いうなぎに粉さんせう振るも忘れてどんぶりは空^{から}
 おかみさんはサン何とかといふ店の名を連呼して道を教へぬ
 句碑の前を通りすぎゆく男子らに混じりて子規のはしやぐ声聞く
 源兵衛川の水多ければ飛び石は途切れて続く鏡の国へ
 写真にはうつらぬほどの透明な池あり自転車置き場のかげに
 「宮さんの川」のほとりに木造の精神科あり水は動かず
 工場とマックスバリュの間より仰ぐ迫力満点の富士

蜘蛛

くろだたけし

惨劇を起こした時に不利だけど書き溜めずにはいられなかった
 分身に命はなくてでくのぼうやがて消えるが逃げると困る
 ちようどいい袖の長さになるように腕の長さを変えるのは無理
 つらくても意味を見つけちゃ負けなんだオリンピックもバンデミックも
 今までに僕が嘘ではないことを言えたかどうか誰も知らない
 絶対に聞いちゃだめだよ今までに人を殺したことはあるかと
 空中に雫が停止するように自分の糸でぶら下がる蜘蛛
 くつきりと秋が来ている剥きたてのゆでたまごめく朝のプルプル

まよひ蛾

酒匂瑞貴

夏の色忘れた空を背景に君の差し出す手のひらを取る
禁忌 まだ無知な子供であつた頃口移した赤い鉛玉
名も人も知らない街で髪を切る 今年の蟬はみいんな死んだ
帰る場所の有る者と無い者で買ふやけに重たい避妊具の箱
人肌はまるで蜜蝋 肩に歯を立てる親より生きしをとこの
吾亦紅生花のままで捨てられて繋ぐこの手も緩めてしまふ
私たち道連れ同士この部屋で棚の刃物のやうに眠らう
孤独たす孤独は孤独まよひ蛾を雨に放つて飛ぶのを見つむ

町に暮らす

佐々木小く

お客さんが入っているのを見たことがない絨毯屋のバイトの貼り紙
マンションの二階と五階のベランダでそれぞれ布団を干しているひと
十二階建てマンションのてっぺんでカラスは今日も黒いままいる
天井がおばあちゃんちと同じ柄の歯医者で奥歯を押され続ける
市役所と警察署の区別がつかず市役所に行くのも怖かった
公園でカップラーメン食べている少年たちのまぶしいけはい
ケンテルという名の町のケーキ屋の店長の名は松田謙輝
婦人科の扉は開け放たれていてはじめて目にしたスイッチがある

五線の下

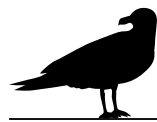
佐藤氷魚

チェロと弓、愚かな恋の顛末をグレーの楽器ケースにしまう
もう音は響きませんか裏路地の金木犀は香りませんか
やけに長い noteのあと散らかった音符をひとつひとつ並べる
十六夜の月を横目に久々の練習場へ チェロが重たい
五線譜の一本橋を振り向かず駆け抜けてゆくドソラミラレソ
床板のいくつも開いた穴穴にチェロ弾きたちの逸話が眠る
ステージは音楽だった音楽の中にわたしがいるだけだった
〈やさしく〉と五線の下のきみの字がささやく先へ音の流れる

蹉 跌

汐射ハルカ

背を向ける怖へるために振り返る溢れさせるか眼瞼やか
こなゆきはまひ散る夜を探せどもよんだ雲に阻まれし空
ねがひとはなにを下地に思ふべき例へば葉を打つ雨の滴か
夜半の月かよひ慣れたる坂道がひとすぢに照る雪ぞくやしき
なに思ふなに躊躇ふやひとときをやさしく語れわが恋ふ人よ
窓辺には小さな花が二輪だけ並びて揺れてきみそ思はむ
崖を這う枝の梢のしづく以て楔の痛手うるほしたまへ
天空を支えるが如檜葉の幹かのをみなごにちから与へむ



浮かんでる空のしつぽを食べたから君はなかなか居つかない猫

健康であろうと無理を繰り返す納豆だけを食べるから死ぬ

きしんでる林檎の内部とざされてひらかれてある星のささやき

帰り道よくコロッケを買ったけど 実はあるより好きじゃなかった

ラーメン屋に入って食べる 吉野家の牛丼を買う やってみたいこと

「絶品はとくに卵を抱いたメス」産院待合室のニュースは

何だつていいから一步を踏み出せるきっかけであれ茹ですぎの蕎麦

包丁をストンと落とす包丁を落とした場所から食材になる

しし唐をもらってしまい煮浸しにするためじゃこを買いに出る夜

冷たさをどうにか咀嚼したくってやたらと青い花びらを食む

蟹蒲の区別がつかぬ頃の幸せを病食で噛み締めてゐる

あじまんをどうぞと君に差し出され僕が食べるは今川焼

向かい合う君に見立てる一輪の花とディナーを楽しむせめて

次こそは愛されるためうまれたいもそもそと食うカロリーメイト

さみどりの風船秋の山を越え到来物のマスカット食む

チョコパイとパピコがいつも揃ってたおばあちゃん家にほこりの光る

◆ 上

◆ 大橋春人

◆ 岡田濫

◆ 小椋 杏

◆ 小澤ほのか

◆ 音平まど

◆ 貝澤駿一

◆ がね

◆ 廻れ井戸

◆ 河岸景都

◆ 菊池洋勝

◆ 北村美晴

◆ 橘高なつめ

◆ 君村類

◆ 久助

◆ 佐々木小く

テーマ詠「食」



沈む足、仄暗い中腰掛けるポップコーンにも宿命はある
 大戸屋のメニューが秋を体现し、あの人に秋 わたしにも秋
 希望とは身近なものでコンビニのカップアイスも例外でなく
 お茶を淹れ二人で食べる葛餅の甘さのように生きていこうね
 キッチンと客席をゆく導線に汗光らせし若きシェフおり
 ぶりかまをうまく食べれぬ我なれど食物連鎖の頂点におり
 冷蔵庫のドアポケットに水菓子をふたつ残して夏を見送る
 こんなにも言葉の礫^{つらみ}投げ合つて夕餉にひずみ始める夜戦場
 ひとりでも生きてゆきますあざやかな菊のおひたししやくしやくと食み
 くらしのし 布団にもつそり擬態してポテチのカスを食すカメレオン
 ドーナツの環を成したるかたちゆえ失われゆく熱量のあり
 食事する鳥を見たくて餌を置く菱びて行くのは林檎だけなのか
 太るよと咎める人もいないのに手に取っている豆腐そうめん
 きっかけが欲しくてきみのお皿だけアラビータの唐辛子足す
 穂芒を噎せながら食う父を見た南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏
 椎茸が好きだしばらく椎茸のこと考えるからほつといて

◆ 相河東
 ◆ あき子
 ◆ 麻数
 ◆ 麻倉ゆえ
 ◆ アダムス理恵
 ◆ 天野うずめ
 ◆ 雨虎俊寛
 ◆ 新井きわ
 ◆ 有村桔梗
 ◆ 歩歩
 ◆ 五十子尚夏
 ◆ 石川順一
 ◆ 伊藤すみこ
 ◆ インアン
 ◆ 宇祖田都子
 ◆ 泳二

BODY

詩季

「ねえねえ」と腰にまとわる頭から君の夏の日おひさま匂う
 澄んだ目が追いついて混沌の世界に降りる光の加減
 なだらかな肩だったから幸せがすべり落ちたと言われてなみだ
 小走りで近づく君に心拍がたたたたん整列しない
 魔法の手隠し持つ君ほんのりと昏き廊下に灯す菜の花
 お習字をいいねと褒め合う教室の後ろに並ぶ「こころ」に「こころ」
 柔らかなお尻を撫でる温かい陽ざしが君に降りますように
 潔く入浴剤は泡となり人魚になれず浮かぶくるぶし

ぱびゅぺぱになる

鹿ヶ谷街庵

峰不二子が下着を脱いだ瞬間に大事な場所がぱびゅぺぱになる
 食糞をしたあとバグが父さんの顔を舐めてる日曜の朝
 異端児と思われたくて自販機でおしるこばかり買っていた日々
 「双子ならテレパシーとか使える？」としつこく訊かれ「使える」と云う
 こち亀を全巻そろえた友だちのまゆ毛が徐々につながってきた
 キャバ嬢の名刺を見つけた嫁さんの打点の高いドロップキック
 夕暮れに哀川翔のマネをする きみが泣きやむまで何度でも
 延々とつづく坂道 そのような人生だけど、まあ、いいでしょう

すべてをおしえることはできない

嶋田さくらこ

かなしいよ すくいとられる金魚には感情がなくて夏は終わった
 ままごとが生活になるキッチンの窓辺に豆苗育てたりして
 プランターに植えてないのに花が咲くみたいに人生なんとかしたい
 ストープを初めて点けた十月の、芋を焼く母、距離を取る猫
 もう死んでしまった猫の名を呼んでねむった長い秋のはじまり
 新しく生きることから逃げたくて 切りたての髪をなでてほしくて
 よく知らない人にやさしくされるのに本当の名前なんか知らない
 水鳥を棲まわせているみずうみの冬をあなたは覚えていますか

虹を喪う

西鎮

真夜中の何処かの部屋の水洗が最終列車の音に聴こえる
 スキレットはバターを融かす極小の虹を孕んで爆ぜてゆく泡
 でもたしか劣性遺伝のはず、甘くくちづけられた一重瞼は
 こんなにも会いたい夜を遡るタクシーきつと誰も魚で
 ぐんぐんと加速していたプランコがひとりになってあびる月光
 わたしにもあったのだろう しゃぼん玉ははじける刹那虹を喪う
 石榴裂けて実をさらしつづ濡れている秋は数多の自死を抱えて
 こんな夜は喋れる犬の顔をしてずっと隣にいるよね、きみは

百番を越えてもつづく宇治橋で出会った少女らのあそび歌
S.Lの展示車両、ブルトレの展示車両、観喜寺町黄砂に埋もれり
木屋町の郵便ポストを見返れば笑い仏のようなくちもと
標野ゆくアカネムラサキアイキハダ濁点のごと雨は降りたり
お土産のスノードームを贈り合うべくとわたし★明るい夜だ
辻を抜けこと怖い辻を抜け京福電車はゆっくり走る
越して来て初めて知ったこの街にピューロランドも海も無いこと
うろの中に鉦光れりあえかなるK植物園のかくろえ

幽霊少女の舞踏会

白石 夜花

街外れ廃劇場に現れるドレス姿の幽霊少女
観客もいない舞台上で楽しげに踊る少女はとても綺麗で
とある夜ボクは少女に聞いてみた死の真相と踊る理由を
そうすると少女はボクにキスをしてニコリと笑い語り始めた
ワタシはね殺されたんだこの場所で仕方がないわ罪人だもの
ただ一度見て欲しかっただけなのよワタシが光るその瞬間を
けどそれももう叶ったわありがとう愛しているわじゃあさようなら
そう言って少女は消えていったんだ一輪の花舞台に残し

天蓋の星

葉子

水瓶ひっくり返してもう二度と歩けなくてもやり直せるよ
たくさんのさよならが咲いた衛星になってわたしをずっと眺めてる
それでも生きてる体が不思議なの残りの時間わからないまま
あなたならなんて言うのか考えて眠れないのがたのしいなんて
どんな歌聴いてるんだろう君とはまだまだまだです好きになるよ
誰にも相応しくなくて誰とでも良くはないからわたしを見てて
前世の話はおしまい僕を見て怖い夜なんかも来ないよ
ほんとうはとてもあきらめが悪くて最後の光捨てないつもり

シトラスリボン

龍翔

秋麗すすきも風に揺れてゐる今日はわくわくワクワクチン日和
少し汗ばむ無防備な額へと体温計は突き付けられる
問題はありませんよ、と三週間前にも会った医師に言はれる
左腕だらり垂らして燃え尽きたボクサーみたいだなって思った
同じものを肉に打たれたひとびとが同じ方向むいて座れり
五分ごとに時を知らせる職員のエプロンすべてピンク色なり
一歳児の食事についての掲示など見ながら十五分間過ごしぬ
保健所のちひさなホールに飾られたおほきなおほきなシトラスリボン

今日の食べもの

諏訪灯

洗ってくはしから皮か本体か分からなくなるごぼうというもの
すぐ研ぐと言いつつ包丁を抗うトマトの皮へとおろす
薄切りにしたきゅうりから立ち上る水の匂いに河童を思ふ
クセのある茗荷の香りを美味しいと感じる舌も大人になった
生栗の下ごしらえのやりかたを知らないままで主婦二十年
念入りに加熱をしたらやり過ぎて固く縮んだお肉よごめん
レバーから血の塊を丁寧に弔いのごとく取り去っていく
皮のままぼんとつまんで食べられる葡萄の進化の潔いこと

思い出がえり

たえなかすず

分かりにくい寝物語よ あの春に、きみはドミノを倒してしまふ
菜箸をタクト代わりにわたくしの一人芝居はまだ終わらない
もうひとつ湖がある 心、なの いたるところに波紋が見える
あきみは堰越しにただ微笑んで時代のようになっていたのか
霜月の恋に捧げよ充電の百パーセントに満たぬぬくみを
深追いをしてよろめいてお月さまもう誰ひとり海に行かない
ひとりならひとりでもいいふたりならふたりでもいい 夜半から風
もう二度と降りない駅を通過する 乗客、背中に愛の拍手を

秋は

渡邊知博

秋の日の冷たい空気吸い込めばますます重い初めてのコオト
金木犀となりの庭に咲きはじめ匂いはじめて過疎化の一途
うすくらきヴェル垂れたり秋風は色ある世界を見せよひととき
意味もなく校門で待つ秋の午後言葉もなくて人は去り行く
せいしよくのりんりんとなる銀杏の木あああのひともかげを歩めり
あつたかゝい缶コーヒ―を手にもって手に持ったまま手があつたかゝい
日の暮れて夕焼け小焼けまた明日明日も人とひとと別れる
天と地の間に広く空白の人ぼつぼつとあかるき星辰

おのずから

和田晴美

車椅子押す姿勢の固まらぬようバランスボールに仰向けに寝る
ようついの痛い部分を温めるからだは重く痛いものとなり
物干しにソーラー腕時計吊るされて輝く窓の十三日目
豆乳をあたたため過ぎたソイラテの世界波打つ膜のおもてに
成長痛みたいなものと言わなくて良かった柘榴はおのずから割れ
世の中は見えない物に満ちている大丈夫、あなたは見えてるよ
不定愁訴にて物事をなす人の暮らし支える明るいキッチン
夕焼けの空に鳥たちが飛び立てり私もそろそろ帰らなければ

アフィニティ・ルール

六厭めれう

向かい風そんな言葉を聞くまでは強い気持ちで漕いでいられた
たまに剥く牙が怖くて自然とは距離を置きつつ行く散歩道
青き葉を食む黄金虫 みずからの足場とたのむその青き葉を
近いねとあなたが言った雷に触れていたなら聞こえぬそれは
カバーだけ替えて並べた本のごと模様替えした心配は来る
昼間見た映画のことで眠れずに何度もなぞる主人公の死
愛憎を遠く離れてひとりでも熟してゆけるバナナのような
浚渫を繰り返しつつこの土砂もきつとどこかの河を埋める

クリスタルオレンジジュース

村田一広

ロープの端持つてくれていると思つてたあなたがぬない初めからぬない
強がつて怖くないといふほど怖い寂しくないといふほど寂しい
君をさらふやうにボルシェのドア閉まるウインドウ叩き割つてもよいか
Tシャツは四角かつたつけ？ 袋からとり出せば手足伸ばしてTに
先導され後押しされて北風とめぐりゆくイルミネーションの街
十一ぴき猫をめぐつて現れた師走の子猫オフィスに飾る
かき氷は小さなクリスマスツリーまたたき返す暖炉明かりに
クリスタルにオレンジジュース注ぎゆく赤い影絵が踊りはじめる

小春日和に

多香子

聖橋ぬけて赤い地下鉄は小春日和のつかの間を知る
ほかほかのかぼちゃのスープ用意してあなたの帰り待つ冬至の日
一日に一つのことをやとしてああ疲れたと一日の終わり
大丈夫きつと明日は晴れるから、多分わたしも笑顔になるから
いつからか会わなくなった松茸の行方はテレビで見ているだけね
金網の中でさえずるカナリアは自由なくても歌い続ける
金色の木の実をつづったネックレス切れた糸から秋がこぼれる
この胸の全部の愛をあげたのに小春日和にふて寝のミケちゃん

変える

瀧口美和

秋だつて新しくなる夕暮れは明日へ続くつまり約束
落ちてきた朽葉抱きとめ僕たちは生まれ変わると言うより変える
柵しがみを内から揺らす悪くない人ばかりが囚われている
風だけが正直だから名も知らぬ花の香りで鼻腔が痛い
恐怖より不安が勝る国にいて月のない夜を新月と呼ぶ
どうなるか分からないっていうことはまだどうにでもなるってことだ
秋の夜は長いと決めて飛び出せば案外悪くないまよい道
朽ちてゆく秋の悦び実を結ぶ秋の淋しさ私が変わる

冬の準備

ゆや ゆき

吸い込んだ空気は初冬地面には凍しもれた枯れ葉ザクリと踏んで
スニーカー風を通して冷たくてブーツ履くには少しためらう
去年まで何着てたつけ裏地ないジャケット広げ途方に暮れる
冬囲いするため切った薔薇の木の花びら散つてこだけきれい
試運転するはずだったストーブは火がつくことで許されている
歩きたびタイヤ交換してる家週末はもう平地でも雪
根雪にはならないだろう甘く見て冬の準備はいつもギリギリ
鈍色の空と同化しモノクロの世界に変わる冬のあれこれ

器を覗いて

ゆりこ

脳ドック受ける私は竹輪めく筒で動けぬキュウリの気持ち
いつだつてきみが一番煮卵を少し甘めにする舌先に
ラーメンに氷をふたつ入れてみる口内炎に滲みる味噌味
アクリルの板で挟んだ乳房に金平糖が散らばる写真
卵巣のごときザクロの実を裂いてこの世へ渡せぬ命を思う
腹を割くようにスプーンを差し入れて帝王気取りで食むオムライス
白桃を剥いてわかった外からは見えぬ傷みがあるということ
蜜入りのリングゴは蜜から腐りゆく病んだ心は見せないように

くださいのビュー

竹林ミ來

「パスワードは別送します」だが俺にパスは一生回つてこない
図書館のゲートをくぐれば声量が落ちるかたまに裏声になる
キャンディでお釣りが済んでいたところに札束として渡す付箋紙
残額はアプリでわかる献立もあなたと会える残り時間も
「加熱後はここを持つ」から抜け出して切り口を持つ勇氣まだない
美容師に相談をする「文章のくせもパーマでごまかせますか」
毎月のように自分のオールタイムベストを作つてないと死ぬ歳
定時より5分も早く着いたバスうれしからんや袋ください

明日もあかるい

丹花ヨム

五年住む2DK南向き 花束みたいな時間だった
薄皮を剥がす音さえ聞こえそう 目と目があつて六秒の恋
フルグラを測つて食べて猫に餌 ルーチン好きなあなたの時計
熱くて圧いシャワーを浴びる 濡れ髪で「小さな旅」と朝日を見る
二人分を干した竿に陽は隠れど空はあかるい明日もあかるい
朝はジム 昼は仕事で、夜はラン！ あなたの愛は出かけたきりね
驟雨聞く あなたのTシャツ取りこまず雨の滴りひかりさす空
紺碧の魚が泳ぐ夕暮れにテレワークするあなたは笑う

フィッシュアイ

茅野

病院の軋むソファにできるだけ静かに座る 強くなれない
「唐突にごめん」と笑うところまで君にとっては唐突じゃない
カップ麺よくかき混ぜて平常心をずぞと吸る
モロヘイヤ入りと信じて食べていたスナック菓子の緑あざやか
特大の三角定規が黒板に張り付く音で目が覚める午後
炭酸は弾けてしまう テーブルに薄っすら水玉模様ができる
抱き寄せてしまつてこれは引力じゃなくて自分の意思だとわかる
君以外間延びしている もうずっと僕の瞳は魚眼レンズだ

Dim

千原こはぎ

はや足で薄暗がりをゆく走りかたより止まりかたを知らない
とうとうに揺れる心臓 不機嫌な顔がそんなにきれいだなんで
こまりごと限定で送られてくるLINE いいよ、いまはそれでいい
うっとうしと君の誤解を溶かす耳やっとうっとうしになれたみたいなの
とめどなく欲は溢れてぎりぎりの僕らはいつか壊れるだろう
ガードレールがやけに白くてこれ以上立ち入ることを月は咎める
りんかくが君じゃなかったそんなにも変わつてどこへ行つてしまうの
あしたあたりこも滅ぶかもしれないし触れてよ夜が溶けてゆくまで

波と魚のように

chari

数限りない色をもつ紫陽花をただ一本の黒炭で描く
「割れるからシャボン玉は飛べるの」とフェンスの上を歩く少女は
八月に生まれたんだね重なつて波と魚のように話した
ああ嘘に上下などなく清らかなコーラ溢れる壺を啜える
硝子戸の外の舗道を塗りつぶす雨から逃れる傘がないこと
さみしさの塊ですか午前二時ベンチに座るBOSSの空き缶
飯の死を与えるために圧すれば抗うように蝶は脈打つ
君からの言葉に止めを刺すようにピアスホールを自分で開ける

夢見台ニュータウン

月硝子

美しい地名を台の字に乗せて夢を切り売りしたニュータウン
北欧の家具の隙間に幸せの脱け殻潜むオープンハウス
空港も駅も言葉もアレグロの東京は遠巻きに恋う場所
怪人と市民の区別曖昧な時代のパステルカラー戦隊
後朝の別れの言葉さえぎつてデデポツポデデポツポッポー
顔ばかり描いて一つの恋実る幼いマンガ帳が恋しい
時折は地元の子らに埴輪の子混じる古墳の史跡公園
見上げればいつもブレない変顔の幼なじみの太陽の塔

ない

宮岡 蓮子

金はない 意気地もないし夢もない そんなあなたが好きだったのに
職場でも布団の中でも呼び方は名字に「さん」付け 名もなき女
新居にはカーテンつけてくれますか 朝は知らぬ間に来るほうがいい
誕生日なにがほしいか問われたら この関係の正しい名前
ふわふわ わたしからっぽシャボン玉 あのこよりずっと透明だけど
ファミレスのメニューを広げて覗き込む 膝にまだ見ぬ子どもを想う
海とあとドーナツショップさえあれば生きていけるよ きみはどうなの
執着のヴェールをひとつまたひとつ脱いでは夜のペランダに干す

食事が終わる

深山睦美

おそらくは自分が最初の目撃者 ゲームで人を殺す君の顔
今の位置からなら狙える君の腕 必死に動かす弱すぎるアーム
「顔みたい」3つの点を探してる君は自分の脳みそと遊ぶ
おいしいの笑顔につられおしいと 好き嫌いが無いはずの舌ペロ
幸いにも今日は天気が悪いから 天気の話ができるじゃないか
後半は蛇足ですねと言いつつ 心臓に悪い映画の感想
5分後の予定も5年後の予定もないまま君との食事が終わる
雨傘が頭上でたてる音に押され ぼくらはゆっくり駅へと向かう

ある一語のけがされていくさまを見つ 紙束に紙を加えゆくのみ

虫武一俊

日中は無人の家にて片隅の陽だまりを行く蟻の葬列
夕影が伸びればこも長い道 神無月まだ戸惑うばかり
何も上手いかわからない夜へ 肉まんを許すことにより励ましている
いつできたかわからない傷に気がついて舐める 何でもわきたいから
秋のない年もふたたびあるだろう風に流れ散る選挙ポスター
お金のために憶えたことのほぼすべてお金を得れば忘れてしまふ
違うものが一緒にやっついていくことの昼休憩はとりあえず外へ
おれはおれをどうしたいのか紅葉は理屈を越えてくることもある

そっと寄る秋

六浦筆の助

渋皮をただ黙々と剥く母の汚れた爪にそっと寄る秋
受診後に焼き芋片手に公園で頬張る君にそっと寄る秋
夕暮れに石焼き芋のアナウンス 駆けてく子らにそっと寄る秋
運動会駆けつこ五位で賞状を手にし泣く子にそっと寄る秋
いちめんの秋桜静かに眺めてる男女の隙間にそっと寄る秋
やっとう手に入れたサンマを焼く父の七輪煙たくそっと寄る秋
我が家へと孫が押す祖母の膝に降る金木犀にそっと寄る秋
「さあ飲め」と新酒を枡に注ぎます友の墓前添えればそっと寄る秋

とん とん とん

御糸さち

そう、ここは天国だから魂の行き着く場所よスーパーマーケット
半額のシールきらきらかけがえのなかった命だったあなたが
同じ豚だったのだろう同じ日に期限の切れる肩ロース二枚
一日分あたらしい死とくらべても仕方ないのよレクイエムだわ
レジへ行く お金を払う これでもう肉は私のものになりました。
半額で買ったお肉の筋を切る動きはしないお肉の筋を
表面をこんがりと焼く最期まで秘められていたその表面を
【肉食をしていた頃の人類】とキャプション付きで教科書に載る

ドラッグストア

三浦くもり

カートンをばらばらにする 価値は変わらないから君、安心しなよ
流行のドリンクの重種ばかり売る店で働いたまに憂鬱
半額のシールを貼られた食パンは少し安心して並んでる
ひらがなが読めない人にひらがなに近い言葉で説明をする
テスターを全部試した右腕に守られている赤子の瞳
ママチャリに全てを乗せて坂道を行く人 救うならあなたがいい
貸したまま返ってこないカッターで誰も殺されてませんように
この街の街灯として娯楽として生活としてドラッグストア

くろわさん、なにが足りない

ともえ夕夏

朝四時のきんと冷えたる窓を知るクロワッサンはきつねの尾のいろ
秋風の通りみちらし学校の指定ジャージに空いたあなほこ
十五才ぶかぶかだった制服をみつちりとさせ二次発酵かよ
さがしものは鞆や机の中などないと陽水さんも言ひけり
きやあ、といふやまぶき色の聲それはよしんば戀をしてゐなくとも
男の子たちはほとんどん背が伸びて私もどこかはりたいの、とふ
木枯しの中にぎはひしさざんかのやうに最後の模試を咲かせよ
おとなしく面砲に葉を塗り夜はものおもはずにさつさと眠る

今年の秋も暑かった

中村成志

あかつきの濡れた路面の信号の黄を斬り削る二条の轍
世界すべての空蟬が持つ背の裂け目（はんぶんだけにふっている雨）
始祖鳥の鱗をおもう長月の木漏れ陽泥へ拡がるを見て
秋にこそ萌え出づる芽のあることの肩掴まれるように涼風
火掻き棒鉄の扉へ添うように立てかけられたまま蔦の中
メリケン粉流しちり紙えもん掛けバタークリームケーキはだいろ
掃き溜めた虚ろも気圧のせいだから蔭があんなに低く飛んでる
蛸壺に一人ひとりと沈みゆく道の黄昏耳を除いて

姉と弟

深影コトハ

外が見える 外から見える 週末のカップル限定席は陽だまり
店員の誤解はあえてそのままに真昼ひとつのパフェを分け合う
背が伸びたそれより背筋が伸びていた弟のようでじゃなかった人
眼裏に遠い記憶が揺れるのです綺麗な人でいたい十月
けやき坂通りのTVクルーらは月の従者のように光って
公園の薄暗がりに残されて泣いたあなたが愛おしかった
ギリギリと軋む時計をばちんと ばちんと叩けば静止する列
いつだって私があなたの手を引いて引かれていたのかもしれないね

永遠になる

水也

いつまでも思っています思うだけしかできないの焦れる青さよ
交わることはなかったの私たち道は遠くて憧れひかる
鮮烈な七色纏うひとのこと指先ひとつ千も惑わす
まっさらな姿で海に飛び込むの泡になったらあなたに会える
あたたかい指で狂気をなぞりきる月の雫を振り払うよう
空虚だけ胸に巣くうの眠ってるだけがよかったふかくふかくと
永遠が私の胸につきささる息をとめてく泡になりたい
いつかには消えた言葉が生まれたりするのだろうか前を向けたら

おとりやLIFE

にう

カゴに入れうーんと悩んで削除してやっぱり欲しいとカゴに入れとく
ある程度予算を決めてショッピング多少のオーバー予想の範疇
ポイントがたまったらばプレゼントをどれにしようか脳内会議
これ買えば送料無料とあてもない鞆下1セットカートに入れる
気になった商品ページを一旦閉じ「商品 レビュー」と検索かける
まだかなと指折り数えて商品を待つてる日々が夢のピークか
ダンボールの梱包開けて商品をみたら夢から現実になる
ひたすらに空虚な時間を満たすため今日も夢見てログインをする

またしても何も知らない大泉洋さん(23)

西淳子

The die is cast. 死が出演者。またしても何も知らない大泉洋
一人つて独りじゃなくてまたしても何も知らない大泉洋
双子または幽体離脱またしても何も知らない大泉洋
三竦みみたいなボクらまたしても何も知らない大泉洋
四捨五入すれば二十だまたしても何も知らない大泉洋
自転ってロックンロールまたしても何も知らない大泉洋
ふりだしにもどって、泣いて、またしても何も知らない大泉洋
でたらめに生きていくのだまたしても何も知らない大泉洋

ミスター・ミスタードーナツ

西村曜

人間のこころの在り処ドーナツでいえばおそらく穴のところに
 おかわりのできるカフェオレいまこの一回きりのミスタードーナツ
 存在がぎりんであるということはないか悲しいことかもしれず
 「珈琲のはじめかた」つて雑誌を買う帰路で、ああ、もうはじまっている
 あたらしいバターに深く刃を入れるこころなら奥から壊すべし
 牛乳で芋を煮ている夕暮にかなしいひととみんな友だち
 リュックから出ているねぎの長さだけ知らないひとを愛してしまう
 キスシーン多い映画を観て帰る夫もわたしもちろんまりとして

迷子

ネコノカナエ

わたくしのマスターキーで開かない二階の北のいくつかの部屋
 机にはスティックのりが立っていてがったんしてもまだ立っていて
 囁むときは壊れる音がしてしまうべつこうあめはうつくしかった
 青毛虫排水口へ這ってゆき危ないものに惹かれてしまう
 まあどうせ夢は密室うなされるきみの寝言はぜんぜんわからん
 夏用の靴下だった夏用のさみしさだった足が冷たい
 上むきに蛇口があつて上むきにぶつ放したい衝動がある
 はちやめちやな分岐をたどり走つたらいまでも迷子になれるでしょうか

迷子のぼくの現在地（うたの日九十月まどめ）

薄荷。

靴ひもをピンクのものに取り替えて秋めいた街の舗道を歩く
 どこまでも前にむかつて行けばいい靴下の色は信号のおお
 引力に逆らいながら坂道をよいよい登る空は夕焼け
 赤信号待つてる間にタントトタン踵を鳴らせば曲が生まれる
 紅色の煉瓦のビルがある街は中心地から夕暮れていく
 夕闇を逃れるように国道のバス停ふたつぶん歩いて帰る
 指先をじわりじわりと温める缶コーヒートのブルーのラベル
 五分前通つたはずの三叉路を迷子のぼくの現在地とする

いつかみたゆめ

早月くう

背中から誰かが触れる手のひらのささ先に心臓がある
 薄暗いキッチンに立つ 窓からのひかりで虹を吐きだす蛇口
 覗きこむ鏡のなかで左目の黒目が端から剥がれはじめる
 花嫁が金色バンダの着ぐるみで余興に踊るブレイクダンス
 終点でスカイツリーと満月が並ぶ世界を見下ろしている
 爆撃だ 窓の向こうにテレビでも見たことのない熱と振動
 ふたりしてさびれたゲーセン抜け出してキリンの浮き輪で外海へ出る
 何度も何度も繰り返してみる夢のなか（再放送だ）と気がついてい

東京行き

ヒプノ寿司マイク

軌道遙か地鳴り響かせ双灯が三百キロで股下抜ける
 制服の袖振り指した手袋の白い軌跡は安全運行
 上京のトンネル窓の中わたし今日から嫌いになった大阪
 目白へと揺れる車内で思い出す乙女ロードの執事の角度
 最終ののぞみに乗って727℃を君に届ける
 端正な少年しゅつと待つとるね電車を十日渋谷の画廊
 寝転んで南へ北へ二歳児が持つ東海道線は満員
 ホーム降り踏切渡る黄昏は西陽の部屋へ敷居踏む足

1 week after

まさけ

彼と会う約束をした日曜をお祭りにする七色のペン
 陰鬱なはずの月曜さえ軽く私のように浮かぶ秋雲
 幸福はそんなに長く続かない。誰かに聞いた「今週は雨」
 不定期に苛まれてる偏頭痛みたいに雨が始まる五眼
 進捗の確認をする感覚で今日2回目のそらジローに会う
 揺れ動く上皿天秤めいている雨にすべての重りを載せる
 迷信は信じていないほうだけど3つ作つたてるてる坊主
 子供っぽいところも好きだと言う彼にてるてる坊主の奇跡を話す

雨のへり

廣珍堂

五分ごとに勧誘の電話かかり来も留守電の我律儀に受けて
 ばあちやんが巾着袋を縫つてゐるスマホのためと雨の縁側
 ピンクピンク桜色より濃いものを雨よ生み出せピンクピンク
 学生を新入社員に変へてゐる歓迎会に土砂降りの雨
 投資用不動産だけのビラ撒けば雷雨の夜の街並み怪し
 皆眠る夜行列車のデツキへと雨の降り来て連結器鳴る
 虫の声ふつと止まりて雨の音秋の星座の欠片混ざれよ
 蒸し暑き峠のうへに雨降れば山を包みて稲妻渡る

うたは物語のおわり

松島ゆうり

首筋のすべらかな朝あの風の岬へ髪を泳がせにゆく
 できている世界はこの目で見えたものと見にゆけるものぞんぶ、ぞんぶで
 むかしむかし波がさらった砂時計きみはわたしのなにがほしいの？
 汀のここは物語のおわり待宵草が朝日に透ける
 たれもみないつか空へとかへるものスターフィッシュのもつ解像度
 一 三 五 和音の星が落ちてゆくかつて信じたはやさで、すべて
 ゆりかごの速度をおもう通信の音はきえ風きえて青藍
 みるでしょう。きいろいことり、けのながいいぬのやさしさ、あなたもいつか